
VaNTo

芦川氣白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VANTO

【Zコード】

Z1025Z

【作者名】

芦川氣白

【あらすじ】

桜が舞う中騎士団に入りたいという真澤火願。騎士団がいる屋敷の大門にやつてくるが一人の青年に会う。一体全体そのひとは騎士なのか…。そして、屋敷に入るとそこには初めてみる風景が。総長に会い、自分が騎士になりたいと言う理由を話す。すると、総長が発した一言に驚く火願。果たして、火願はどうすることか…。

桜舞う季節（？）

騎士は誇りのため、誇りを守ることを決意した軍人のこと。
始まりは桜吹雪舞う如く春のこと…。

騎士達は集結した。

月明かりに照らされて騎士団はそれぞれ誇りのために刃を交える事になる……。

第一話・桜舞う季節

羽芽野街中心部。ここに大きな屋敷がある。

そして、そこには騎士達はいた。

俺も騎士団に入りたい

…。

そう。俺には守りたいものがある。だから俺は騎士になる。

俺の名前は真澤

マサワ

ヒガノ

火願。

桜が舞う中、俺は心に誓つた。

四月一日。

俺は騎士団がいる屋敷の外にある大門を前にしていた。桜の香りがしたと同時に俺は自分よりかはるかに大きな門の扉を一回ノックした。

「こんなんで誰かくんのか…？」

小さく呟いてみた。近づいてくる足音も、喋り声も聞こえない。

「留守…！？」

眉間に皺を寄せてしまった。それから舌打ちをして、大門に背を向けてしまった。

カタツという音が大門の方から聞こえた。

しかし振り向いても大門が開く気配はなかつた。

「んだよ…。期待はずれかあ…。」

ため息をついた。そして再び大門に背を向ける。

「期待はずれつて迎えに来てやつた俺に対する言い方かよおつ…！」

大門の上方から聞こえた謎の声。男：の子…？

とりあえず、大門の屋根つぽい所を見るとそこに、着物つぽいのを着た目の大きい青年が立つっていた。何故あんな高い所にのれたのだろう…。

（もしかして騎士！？）

俺は少しそこにいる青年を無言で見ていた。

「なんだよつー？」

青年が俺に問いただした。それはそうだろう。俺は無言でいたんだから。

「…つあ、えーっと…。俺、騎士になりたいんだ…！だから此処に…」

青年の問いに答えていた途中で青年が口を挟んできた。

「騎士いーーーあーーー。入れてやるから、ちょっと待つてなあーーー！」

青年が門の屋根の上から消えた。いや…、落ちていったという方が正しいか…？

少々時間はとつたがこれでやっと俺も騎士になれる。俺の中はお祭り騒ぎ。そう思つていると大門がゆっくりと開いた。大門はギシギシと音をたてている。結構古いのだろう。

「おいっーーー入れっーーー！」

門を開けていたのは、あの青年たつた一人だけ。

（体は小さいのに力はあるんだな…。）

俺は大門を潜り抜け、目の前にはあの騎士団が住む屋敷があつた。

俺はずつと、あの大門の外でしか見てなかつたけれど、いざ目の前

にしてみると、かなりスケールが高く感じて訳も分からず、緊張してしまった。俺が大門を潜り抜けた時、すぐに大門は閉じられた。閉じる時も同じようにギシギシと音をたてていた。

俺は青年に問いかけた。

「あんたはどうして大門の上に上れたんだ？ ジャンプ力半端ないのか！？」

青年は大門を挟んでいる壁の一つを指差した。そこにははしごが置いてあった。

「あれを使って大門にのった。」

青年は当たり前に答えた。俺は思わず青年にツツコミをいれてしまつた。

「何だあ、それっ！？ はしご使つたのかよつ！？」

「という、聞きなれているようなツツコミを。

「悲しいツツコミだな…。」

呆れたような口調で言われてしまつた。確かに自分でツツコミで結構悲しいツツコミで終わってしまった。

氣を取り戻して俺は青年についていった。

青年は屋敷の戸を開け、屋敷の中に入つていつた。俺も後へついていった。しばらく長い廊下を歩いた。庭が見える。桜の木もあつた。風と共に桜が一枚、一枚香りを放ちながら舞つていた。

俺は立ち止まり、それを見ていた。

「何やつてんだよお！？ さつさと来いつ！」

青年の怒鳴り声が聞こえ我に返るよう歩き出した。

青年は一つの部屋の前で足を止め、戸を開けた。

「総長っ！！ 騎士になりたいって奴いたから連れてきたぜえ！？」

中に偉い人がいることが分かつた。俺は部屋に入らず、その総長つて人に一礼した。

顔を上げると総長がにっこりとしていた。

「入りなさい…。」

総長は俺を部屋に入れた。いや、入れてくれた。

部屋の戸が閉まる音。戸の向こう側での青年がいた。青年は戻つていった。

目線を変えて総長の方に目線を移動した。

「えつと、俺、火願。真澤火願つていいます!! 騎士になつて弟を守りたいんです!! だから…。」

途中で言葉が途切れてしまった。

俺には、弟がいて歳はもう十になるだろう。俺の八つ下だ。とても病弱な弟ですぐに体調を崩してしまった。ある日、そんな弟が恐ろしい病におかされてしまつた。医師からは、およそ5年の寿命と告げられた。だから、俺は弟を守りたいんだ。

いや、守らなきやならないんだ。兄として…。

総長は微笑んでいた。なぜ、微笑んでいるのだらう。

「弟さんのために君は騎士になりたいんだね…。」

俺を真っ直ぐ見て総長は言った。

「はいっ!!」

俺はすぐに答えた。

「いい決心だ…。けど君、刀で人を斬つたことはあるかい?」

「…。」

人を斬つたこと…。俺は刀を持つてゐるだけで斬つたことはなかつた。

「では…君がどれほどの男か、確かめることにしよう…。」

総長は俺に戦えつて言つたのだろう…。

「その刀が君の飾りじゃないことを祈るよ…。」

総長は俺にそう言つてから立ち上がり戸を開け庭へ行つた。俺も部屋から出て庭へ行つた。庭には、大きなあの桜の木があつた。いつ見ても綺麗だな…。

つて考へてる暇なんてない。

「刀を交えるのはいいけど、相手は誰なんですか…？まさか、総長なんてないですよね…？」

初っ端から総長とは戦いたくない。絶対に負けてしまう。だから強い人とは戦いたくない。

（んつ！？俺は自分に甘えてんのか…！？）

弱い奴と戦いなんて、戦士として、騎士として持つてはならない心だ。

強い奴と戦わなきやならないのに…。

「狼河君。ロウガ来なさい。」

総長が狼河つて人を呼んだ。総長が戦うんじゃないのか…。狼河つて誰なんだろう…。

俺の目の前に現れたのは背が小さく目が大きい、俺を屋敷に入ってくれたあの青年だった。

（あいつ…狼河つて言うんだ…。）

「よお～！！また、会ったな～！！」

狼河は陽気に俺に挨拶をした。

「真澤火願つ…！よろしくつ…！」

「狼河氷元つ…！刀を構えろつ…！新人さんつ…！」

狼河氷元。青年の本名だ。

俺は言われるがまま、鞘から刀を抜いた。両手で刀を持ち構えた。

「氷元つて言つたか…。構えろよ…刀。」

俺は氷元に刀を抜かないのか聞いた。

氷元は刀を抜かなかつた。

「俺がお前ごときに刀あ構えると思つか？ふざけんなつ…！…なめてんじやあねえぞつ！？」

氷元はそう言うと俺に向かつて走つて來た。

俺は刀を力いっぞに握り締めた。

「あれが新人さん…？」

俺と氷元の戦いを見に來たのか知らぬ間に廊下に人…いや、騎士が

たくさんいた。

たくさんとも五、六人。

「新人さんだよね。あの人、見たこと無いもおーんつ！」

問い合わせに答える一人の騎士団員。

でも、今俺には関係の無いこと。戦いに集中しなくちゃ。

走つてくる氷元。俺は氷元の腹部に突きをいれようとした。しかし、氷元に刀が刺さった感覚がなかつた。と、同時に俺の右腕に激痛がはしつた。

氷元が俺の攻撃を避け俺の右腕に蹴りを繰り出したからだ。俺は刀を離し数メートル突き飛ばされた。

「ぐはっ！？」

痛みを堪えながら立ち上がり氷元に目線をおくるとしたら目の前に刀の刃先があつた。

俺の刀を氷元が持つっていた。俺の目の前にあるのは、俺の刀の刃先だつた。

「分かつたろお…。お前の持つてる力がよおっ！？まだまだ、なんだよおっ！！」

氷元は俺に説教をした。

「つてことは俺…、騎士になれないのか…？」

俺は不安だつた。氷元が俺に刀を渡してくれた。俺は刀を鞘に納めた。

総長や周りで見ていた騎士達が俺の方に近づいてきた。

俺は下を向いてしまつた。

（騎士になりたかったのに…。俺は負けた…。）

弱気になつてしまつた。

「真澤君。」

総長が俺に向かつて静かに言つた。

俺は総長を見た。騎士達は微笑んでいた。俺をからかつているのか

。総長は俺の手を握つた。

「立派な騎士になりなさい……。」

「えつ！？」

俺は睡然としてしまった。

「俺が騎士に！？」

俺は氷元との戦いで負けたのに…何故？

「そうだよ。君は我々の仲間だ…。」

「仲間あ！？」

俺は少し嬉しい気持ちと意味の分からぬ気持ちでいっぱいだった。
「んああっ！？んでだよっ！？総長っ！？こいつは俺との戦いで負けたんだぞあっ！？んで、こいつを騎士にするだあー！？なんのために俺を…」

氷元は俺が騎士になるのを否定しているようだった。総長はため息をした。

「彼は刀の使い方は少しすればすぐ、上手くなる。何よりも瞬発力と反射神経が優れているからなっ！」

総長は俺の戦いつぶりを少し褒めてくれた。

しかし、氷元は俺と総長に背を向け歩き出して行つた。何処へ行くのだろう…？

俺はそんな氷元の背中を見ていた。

すると、騎士団員の一人が俺の手を握つた。

「えつ！？」

俺は驚いた。なんだつて俺の手を握つたのは白くつやのある髪の紫の瞳をした背の低い女…の子だったのだから。

「とりあえず、入団おめでとつー！新人さんっ！」

女の子はニコニコと笑つてくれた。

「氷元はノリの悪い奴だから気にすんなよつー！」

騎士団員の金髪の背の高い男性…が俺の肩を軽く叩いて言つた。

「どうも…。」

俺は「一人にひかいめにそう答えた。

すると、手を握つてた女の子が手を離し、一歩だけバックステップをした。

俺はその女の子を見ていた。

「私は斎花風。イツキカフウ よろしくねつ！！」

女の子は俺の方に向かつてピースをした。

俺はその、花風にニコッと微笑んだ。

「よろしく。俺は真澤火願。」

「火願かあ～。ふ～ん…。よろしくつ！」

花風は何か、元気な子つてことが分かつた。まつ、誰だつてこの子を見てるとそう思えるよな…。

つて考えてるとさつきの金髪の背の高い人が俺の背中をバシッと叩いた。

「つて…！？」

つい、俺は声を出してしまった。

「俺様は雷乱だあつ！！…よろしく頼むぜえつ！！」

二カツと笑つてゐる。雷乱…？少し変わつた名前だ。低い声。いかにも男性つて感じだ。

「よつ…よろしく…。」

俺は背中を叩かれ、少し体が震えた。

「総長つ！！今夜は火願コイツ の入団祝いに皆で一杯どうですかあつ！？」

俺の肩にポンツと手を置いて雷乱が二カツとした。俺はどうすればいいか分からず、雷乱の目を横目で見ていた。

その目は俺を歓迎しているような強い目つきだった。少し嬉しかった。

総長は大きく頷いた。

「ああ、今夜は総騎士幹部長と総騎士幹部副長を呼んで真澤君を祝うとするかつ！！」

俺はやつと正式に騎士として認めてもらえた。心の奥底で思った。

(第一話～桜が舞う季節（？）～…完…)

桜舞う季節（？）

第一話・桜舞う季節（？）

「だつたら、斎君。^{イツキ}君は、^{ナシベ}南部君と田名倉君、それと黒城君、^{コクジョウ}千尋^{チヒロ}ちゃんにそのことを知らせて来てくれないかな？」

総長は花風に微笑みながらそう聞いた。すると花風は持ち前笑顔で頷いた。

「総長は続けて雷乱を見た。^{ライラン}

「槍枝君には、^{ヤリヒ}鶴来君と狼河君、^{ツルギ}梨眞^{ロウガ}ちゃんを呼んで来てほしいな。

いいかな？」

雷乱は勢いよくガッツポーズをした。

「いいに決まつてんだろつ！任せとけいつ！」

雷乱は俺を見た。

「お前さん…いや、火願^{ヒガノ}はどうすんだあ？」

雷乱が俺の名前を呼んでくれた。

少し、騎士団の中に踏み込めた気がした。

さらに俺は嬉しくなつてしまつた。

「真澤君。君には私がこの屋敷の案内をしよう。この屋敷は広いからねえ…。これまたドッコイつーすぐに道に迷つてしまつんだよ…。アハハハハハつ！！」

総長は白慢のできない事を白慢げに叫び、少し笑えた。

花風と雷乱は屋敷の中へ入つていつた。俺は、総長に言われた通り、屋敷の案内をしてもらひことにした。

「まずは、広間からだなつ！真澤君。ついてきたまえ…。」

総長は屋敷の方へ、広間の方へ向かって歩き出した。俺は、総長についていった。

かなり長い時間、俺は、総長と共に廊下を歩いていた。

（もしかして……！？）

「あ、あの……、総長？ もしかして……、道に迷ったとか……ないですよね？」

俺は恐る恐る総長にそう尋ねてみた。すると、総長は……。

「いや……。迷つてはいないぞ……。」

苦笑いをしている。迷つていなければいけないはずはない。

広間には、まだ着かないのだろうか。

それからというものの俺は、数分して広間に辿り着いた。

「此処が広間ですか……。」

俺は少し、立派な造りの広間に驚いた。ここで、騎士団の偉い人達が食事をする。俺も、今夜此処で騎士団の偉い人達と食事をする。「どうだい？ この広間は。立派だろおーーー！」

総長は自慢そうに俺を見た。

「はい……。立派です……。」

俺は、広間を眺めて言つた。

すると、広間の外で誰かがこちらに向かって走る足音が聞こえた。

「や ちよ つーーー！」

この声は……。いつでも明るいあの子……。

「斎君かあ。どうしたんだい？」

やつぱり花風か。総長は花風を見て微笑んだ。障子戸の向こうには花風がこちらを向いて立っていた。

「花風。なんで広間にいるんだ？」

俺は、花風に尋ねた。花風は横目で俺を見た。

「将刃ショウバンとトーアちゃんと黒城と千尋ちゃんに連絡終わったから、そ

一ちょー伝えにきたのーーー！」

花風の顔は微笑んでいた。

(花風つてよく笑うよな…。)

俺は花風に会つた時からそう思つた。明るくて元氣があつて、変なところで男っぽい。でも、きちんとした、列記とした女の子つて…。総長は俺と花風を見て笑い、広間を後にした。

花風は俺を見て微笑んだ。

「広間まで行くの、結構歩いたでしょ？」

広間の床のあたりを見てから花風は目線を変え、遠くの方を見た。俺には花風が見ている遠くの方がよく分からなかつた。

「ああ。総長さんは、方向音痴だな…。」

俺はそんな総長の方向音痴さに呆れていた。多分、花風も同意しているだろ？。花風も呆れ顔を見せていた。

「火願はこれから何か用事でもある？」

「あつ…、いや、俺はとくに…。」

新人だからやることがわからない。それに俺は、この後、夜月が昇つてからしかとくにあれやれとかは言われていない。

「それじゃあ、これから、私とお散歩しない？雷乱さんも黒城さん達も巡察やらでどつか行つちゃつたし…！…で、お散歩を火願と行きたいんだけど…いい？」

花風の大きな瞳が俺を見てきたのが分かつた。俺は意味も分からず息を飲んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1025z/>

VaNTo

2011年12月5日20時54分発行